

第7回

日本医師会

赤い賞

かかりつけ医たちの奮闘

受賞者紹介



主催 日本医師会／産経新聞社

特別協賛  太陽生命

日本医師会

赤ひげ大賞

目次

- 3 第7回「日本医師会 赤ひげ大賞」概要
- 4 主催者挨拶 日本医師会 会長 横倉 義武
- 5 主催者挨拶 産経新聞社 代表取締役社長 飯塚 浩彦
- 6 協賛社挨拶 太陽生命保険株式会社 代表取締役社長 田中 勝英
- 7 第7回 表彰式・レセプション
- 9 赤ひげ先生へのメッセージ
- 10 祝辞

受賞者紹介

- 13 大里 祐一 (秋田県 大里医院理事長)
- 18 千場 純 (神奈川県 三輪医院院長)
- 23 堀川 楊 (新潟県 堀川内科・神経内科医院理事長)
- 28 橋上 好郎 (長野県 医療法人 健生会理事長)
- 33 緒方 俊一郎 (熊本県 緒方医院院長)
- 38 選考講評 日本医師会 常任理事 城守 国斗
- 39 第8回「日本医師会 赤ひげ大賞」推薦概要

第7回「日本医師会 赤ひげ大賞」概要

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、公益社団法人日本医師会と産経新聞社が主催し、「地域の医療現場で長年にわたり、健康を中心に地域住民の生活を支えている医師にスポットを当てて顕彰すること」を目的として、厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジの後援の下、平成24年に創設（第6回より太陽生命保険株式会社が特別協賛）されました。各都道府県医師会から候補者を推薦していただき、選考委員の厳正な協議を経て、第7回「日本医師会 赤ひげ大賞」の受賞者5名が決定しました。

主 催 日本医師会、産経新聞社

後 援 厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ

特別協賛 太陽生命保険株式会社

対 象 者 病を診るだけでなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師。日本医師会の会員及び都道府県医師会の会員で現役の医師（ただし、現職の日医・都道府県医師会役員は除く）。

推薦方法 本賞受賞にふさわしいと思われる方（原則1名以上2名以内）を各都道府県医師会会長が推薦

選考委員 羽毛田 信吾（昭和館館長、宮内庁参与）

向井 千秋（宇宙航空研究開発機構特別参与、東京理科大学特任副学長）

檀 ふみ（女優）

ロバート・キャンベル（国文学研究資料館館長）

吉田 学（厚生労働省医政局長）

小玉 弘之（日本医師会常任理事）

城守 国斗（日本医師会常任理事）

松本 肇（産経新聞社取締役）

河合 雅司（産経新聞社論説委員）

日本医師会 会長

横倉 義武



本日ここに、ご関係の多くの皆さまのご出席のもと、第7回「日本医師会 赤ひげ大賞」の表彰式を行わせていただきますことを心から感謝申し上げます。

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、地域医療の現場で長年にわたり地域住民に寄り添い地道に尽力されている先生方を「現代の赤ひげ先生」に見立て、その功労を顕彰することを目的として、平成24年に創設したものです。

「赤ひげ大賞」の名称の由来は、山本周五郎の時代小説「赤ひげ診療譚」にあります。この「赤ひげ先生」の実在のモデルは、江戸中期に貧民救済施設である小石川養生所で活躍した小川箠船と言われていますが、貧しく不幸な人々に寄り添い、身を粉にして働く頼もしい医師というイメージを思い起こす方も多いのではないのでしょうか。

7回目となる今回、大賞を受賞された5名の先生方は、いずれも各地域において、献身的に医療活動に従事され、患者さんの信頼も厚い方々ばかりであります。

我が国では、超高齢社会を迎え、「人生100年時代」が到来しようとしており、健康で暮らしていただく時間をいかに長くするかが大きな課題になっています。日本医師会では、健康長寿社会を実現するためには、「予防・健康づくり」に力点を置いた医療が必要と考えており、地域で働く医師達にも、単に病を治療するだけでなく、その予防にまで携わることを求めています。国民の皆さんにも、ぜひ、何でも相談できるかかりつけ医をもってもらいたいと思っています。

全ての人が安心して暮らせるまちづくりの実現のため、日本医師会といたしましても、地域の医師達へのバックアップに今後も全力で取り組んで参る所存でありますが、本日お集まりの皆さま方にも、地域住民の方々に寄り添った形で医療を展開している全国の赤ひげ先生がますます活躍できますよう、なお一層のご支援・ご協力を賜りますことをお願い申し上げます。

また、本日は多くの医学生も参加されています。受賞者の方々のお話を聞いて、地域医療に関わりたいという気持ちをより強めていただければ幸いです。

結びになりますが、改めまして、共催の産経新聞社、ご後援の厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ、特別協賛いただきました太陽生命保険株式会社をはじめ、本事業の実施にご尽力いただきました方々に、心より御礼申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

受賞者の先生方、本日は誠にありがとうございました。

産経新聞社
代表取締役社長

飯塚 浩彦



産経新聞社の飯塚でございます。開式にあたり、一言ご挨拶申し上げます。本日は受賞者の皆さま、ならびにご家族の皆さま、誠にありがとうございます。

平成24年に創設された「赤ひげ大賞」は、今年で7回目を迎えました。今回の5名の受賞者の皆さまは、いずれも地域社会の信頼を得ながら、住民の健康な生活を支えてこられた方ばかりで、まさに「現代の赤ひげ先生」にふさわしい医師の皆さんです。

今回の受賞者の中には、これまでで最高齢となる93歳の「赤ひげ先生」、橋上好郎先生もいらっしゃいます。先生は93歳になられた今も介護老人保健施設に従事され、「人生100年時代」と言われる中で、まさに現役で活躍し続けている先生です。

誰もが100歳まで生きることが当たり前になる時代。それに備えて、産経新聞社でも、一昨年から「100歳時代プロジェクト」をスタートさせました。人生設計に関するシンポジウムやフォーラムなどのイベント開催や、情報発信など、さまざまなプロジェクトに取り組んでいます。

多くの人が100歳まで生きられる時代を迎え、一人ひとりの人生設計も、社会の仕組みも、大きな変化を求められています。

年齢を重ねてもいかに健康に、毎日を充実させて生きるか。われわれもさまざまな提言を行って参りたいと思います。

申し上げるまでもなく、この健康な100歳時代を支えるのは、地域に深く根差した医療であり、その医療活動に携わる医師の皆さま、医療関係者の皆さまであります。今後とも皆さまのご尽力を心よりお願いしたいと思います。

私ども産経新聞社は、報道機関として、日本の医療の充実、さらには国民の長寿と健康的な生活の一助となるべく、これまで以上に邁進していく所存でございます。今後とも、皆さま方の一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

結びになりますが、特別協賛をいただいております太陽生命保険株式会社様をはじめ、ご協力、ご尽力いただきました方々に、心より御礼申し上げ、私からのご挨拶いたします。本日は誠に誠にありがとうございます。

太陽生命保険株式会社
代表取締役社長

田中 勝英



「日本医師会 赤ひげ大賞」を受賞された5名の皆さまならびにご家族の皆さま、誠におめでとうございます。

当社が「日本医師会 赤ひげ大賞」に協賛させていただいてから、今回が2回目の授賞式となります。今回受賞された5名の先生方は、地域の人々が安心して毎日を暮らしていけるよう、長年にわたりひたむきに尽力されてきた先生ばかりです。地域で生活する人々に寄り添い、支え、命と向き合ってこられた先生方の姿勢に感銘を受けるとともに深く敬意を表します。

少子化により総人口が減少していく中であって、65歳以上のシニア人口は増加を続け、2025年には総人口の30%を占めることが見込まれるなど、我が国は世界でも類を見ない超高齢社会を迎えます。当社は、平成28年6月より、「健康寿命の延伸」という社会的課題にこたえるために、「従業員」「お客さま」「社会」のすべてを元気にする取り組み、『太陽の元気プロジェクト』を推進しています。その一環として、当社のお客さまを対象に実施した「健康や医療・介護に関するアンケート調査」の結果について、日本医師会総合政策研究機構様が分析を行ったところ、かかりつけ医の存在が、地域の方々に健診・人間ドックの受診など各種予防行動を促したり、幸福の実感やコミュニティへの参加、将来の健康問題への不安・心配の解消など、ポジティブな影響を及ぼすことがわかりました。このように地域におけるかかりつけ医の存在はなくてはならないものとなっています。

地域住民の健康な暮らしを支える先生方を顕彰する「日本医師会 赤ひげ大賞」をより多くの方々に知っていただき、地域医療の充実や理解促進につながることを願い、これからも微力ながら応援を続けていきたいと思っております。

最後に、受賞者の皆さまが今後も地域の医療現場でますますご活躍されることを、そして主催された日本医師会及び産経新聞社の関係者の皆さま、本日ご出席の皆さまのご健勝を心より祈念申し上げます。本日は誠にありがとうございました。

日本医師会

赤ひげ大賞

第7回 表彰式



地域で献身的な医療活動に取り組む医師を顕彰する第7回「日本医師会 赤ひげ大賞」の表彰式とレセプションが平成31年3月15日、東京都内で開かれた。

表彰式で日本医師会の横倉義武会長は「何でも相談できるかかりつけ医をもってもらいたい」と挨拶。産経新聞社の飯塚浩彦社長は「住民の健康な生活を支えてこられた方ばかり」と受賞者をたたえた。

表彰式後に行われたレセプションでは、来賓の安倍晋三首相が「長年にわたり地域住民の健康を支え続けている崇高な使命感と行動力は、まさに現代の赤ひげ先生だ」とたたえた。後援する厚生労働省の根本匠大臣、選考委員の羽毛田信吾氏、檀ふみ氏、ロバート・キャンベル氏が受賞者を祝福した。

第7回受賞者は、大里祐一医師（秋田）▽千場純医師（神奈川）▽堀川楊医師（新潟）▽橋上好郎医師（長野）▽緒方俊一郎医師（熊本）の5名。

表彰式・レセプション



多くの関係者が出席し盛会の表彰式



表彰式



レセプションで受賞者を祝福する安倍首相



レセプションに駆けつけた根本厚生労働大臣と受賞者



5名の受賞者を中心に選考委員ら



学生の質問に答える受賞者

赤ひげ先生へのメッセージ

縁もゆかりもない土地に引っ越してきて子供の検診に行ったのが先生との出会いでした。先生もおじいちゃん先生が亡くなり、病院を引き継いだばかりで緊張してましたよね。でも、優しくて丁寧な診察に子供も私も安心して受診できました。特に注射の早さは子供が泣く暇もないくらい(笑)。家族みんなが先生を大好きになりました。先日、数年ぶりに大学生になった息子が受診したら「大きくなったね」と。先生が覚えていてくれたことをとても喜んでいました。これからも私たちの家族の赤ひげ先生でいてください。私たちもこの地で先生がおじいちゃん先生になるまで一緒に歳を取っていきますからずっとよろしくお願いします！

だいこうママ (40代)

私は、生まれた時から今現在も、F先生にお世話になっております。私だけでなく、両親祖母、地域の人から、困った時はF先生。風邪はもちろん、ありとあらゆるどんな些細な症状でも、診察してくださいます。大先生は高齢でいらっしゃるいますが、診察室に先生の姿があると、それだけで安心できます。現在若先生と一緒に、診察されておりますが、どうかお元気でください。優しく丁寧な診察ありがとうございます。小さな村の先生。往診もされてとても助かっております。どれだけの人が頼りにしていることか。これからもよろしくお願いします。

あられ (40代)

受付時間は短い待ち時間は長い。でもそれは患者とじっくり話すため。先生に会うとほっとします。ずっと私は、朝から晩まで気持ち悪く何を食べても吐いてしまう状態でした。元気になるたくて病院に行ってもどの先生にも心の問題と一言で片付けられ、薬を飲んででもよくならないから病院が大嫌いに。だけどこの先生は違いました。じっくり話を聞いてくれて、丁寧に検査もしてくれました。結果は今までと同じでしたが、体に異常がない事に安心し心にも体にもあった薬を出していただいて、一気に回復したのです。私に快晴が続くようになったのはちょっとうるさい先生のおかげ！本当にありがとうございました。

おひさま (30代)

こちらに引っ越してきてから30年通っているA医院。以前は医者嫌いで、辛くても市販の薬に頼っていたが、A先生に出会ってからは無理をすることがなくなった。好々爺のA先生に診てもらっただけで元気が出てくる。話をして、痛みのある部分に皺っぴいの手を置いてもらうだけで楽になる。まさに「手当」。先日、A先生にそんな話をして感謝すると、笑顔で言われた。「患者さんが元気になることで、私も元気をもらおう。お互い様ですよ」と。そしていつものように「お大事に」と私の目を見て微笑んでくれる。「ここはA1のない老いばれ医院」と言うけれど、ここにはアイがある。気持ちを元気にしてくれるアイの力は偉大です。

タコタコ (70代)

子供の頃、私はマヌケな理由で、診療所へ連れていかれました。鼻の穴に、おもちゃの小さな玉を詰めて、取れなくなってしまったのです。着いてから1時間ほど経ち、やっと先生が現れました。後で知ったのですが、当日は休診日にも関わらず、先生は連絡を受け、趣味のゴルフを切り上げて私のためだけに帰って来てくれたのだそうです。幸い、すぐに玉をピンセットで取り出してくださり、「ピーナッツだったらもっと大変なことになってたよ」と笑顔で語りかけてくれたことを、今でも覚えています。大人になり、趣味のゴルフを途中で切り上げるこの大変さがよく分かりましたので、お礼状を差し上げる次第です。

みやま (20代)

W先生へ
医師に対し恐怖と不信感を抱いてきた私に、医師も1人の人だと教えてくれたのは先生でした。「僕も葛藤してる」。人と人として向き合ってもらっていると感じた瞬間を、私は生涯忘れません。先生、いつも診察室の扉、ずっと手で押さえて待っててくれますよね。そして、私が座ると先生が座る。診察中は自ら動かれ、苦痛がないようにとの先生の優しさを感じ、胸が一杯になります。直ぐにしゃがんで、にっこりと患者と目線を合わせるのも、先生のお人柄だと感じています。どんな薬よりも、その温かさに触れることで私は元気になる、癒されています。W先生と出会えて、私はとても幸せです。先生、ありがとう。

冬花火 (20代)

私の母親は私を育てるため、離婚してすぐにスナックで働き、飲めないお酒を毎日無理して飲んでいたので病気になるのも当然の体で、病院にかかった時には糖尿病で、片目が見えなくなりました。その時、手術のため大きな町の病院にかかり手術した先生がたまたま、母の住んでいる町の病院に異動してきて以来、病院嫌いの母親ですが、精神面でも診てくれる大事な先生です。母もそうですが私も先生には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。母のことをよろしくお願いします。

いちぶん (50代)

1型糖尿病を患い、成人後も継続してM先生に診ていただいていたので、婚期を迎えても小児科患者だった私。結婚が決まった時、長年支えてもらったM先生に晴れ姿を見てもらいたい、強く思った。市立病院の小児科部長である超多忙なM先生が、一患者の結婚式に、時間を割いて来てくれるだろうか。「披露宴にご招待したい」と、正直不安ながら恐れ多くもM先生に伝えたら、「行く行く!」というまさしく二つ返事で喜んでくれ、式当日も、病院で仕事を済ませ、急いで来てくれた。主治医であることは伏せ、幼少時のかかりつけ医として参列してくれたM先生の、ワインで頬を赤くした顔と嬉しい二つ返事が、忘れられない。

かず (40代)

内閣総理大臣

安倍 晋三



本日、栄えある「日本医師会 赤ひげ大賞」を受賞された皆さま、誠におめでとうございます。また、支えてこられた家族の皆さまにも心からお祝い申し上げます。

「赤ひげ大賞」は、地域で活躍されてきた医師にスポットを当て、地域医療の大切さを広める事業として創設され、今年で第7回を迎えました。

今回、受賞された皆さまは、過疎化や高齢化が進む地域において、在宅医療の提供を通して住民に寄り添ってこられた方々、地域における難病患者の退院後の受け皿を担い続けている方、学校医から介護老人保健施設まで、地域に密着した医療を実践している方々と伺っております。

長年にわたり地域住民の健康を支え続けている皆さまの崇高な使命感と行動力は、まさに現代の赤ひげ先生であり、全国30万人いる医師たちの鏡となる存在だと思います。そして、皆さまの受賞は、全国津々浦々で地域医療に携わっていらっしゃる医師の方々の励みとなるものです。

世界に先駆け超高齢化社会を迎えた我が国では、人生100年時代の到来を見据え、健康を維持しつつ長寿を全うされる、健康長寿社会の実現が大きな目標となっています。

その目標を達成するためにも、国民一人ひとりが、住み慣れた地域で暮らし、活躍するための「安心」が必要であり、それを支えるのは、地域の方々にいつも寄り添い、頼りにされる皆さまのような「かかりつけ医」の存在です。

今後、イノベーションの波が大きく押し寄せてくる中で、医療の果たすべき役割はさらに大きく変化していくことが予想されますが、どんなに科学が進歩しようとも、一人ひとりの国民が抱える健康管理や、患者が直面する治療と生活の質の確保は、技術や理論だけで解決はできません。地域にいる赤ひげ先生でなければ解決できないこうした課題に対応するためにも、「かかりつけ医」を中心として、身近なところで、医療・介護が切れ目なく提供される体制の構築を、横倉会長はじめ日本医師会とも協力しながら進めて参ります。そして、世界に冠たる国民皆保険制度を次の世代に引き継いで参ります。

「赤ひげ大賞」事業がますます発展されること、また、皆さま方のますますのご活躍をお祈り申し上げて、私の挨拶といたします。

厚生労働大臣

根本 匠



ただいまご紹介をいただきました厚生労働大臣の根本匠です。本日は、栄えある第7回「日本医師会 赤ひげ大賞」を受賞された5名の皆さまに対し、心からお祝いを申し上げますとともに、地域医療の現場で、長年にわたり貢献してこられた皆さまの活動に、深く敬意を表します。

受賞者の皆さまにおかれましては、住民が安心して生活を送れるよう、それぞれの地域医療の現場で、地域に寄り添いながら、日夜取り組んでいただいていると伺っています。

秋田県の高齢過疎が進む地域で、救急から在宅まで、幅広い医療活動が続けてこられた大里祐一さま、神奈川県横須賀市で、「まちのお医者さん」として地域住民から慕われ、在宅医療の実践に努めてこられた千場純さま、新潟県で、ALSなどの神経難病の治療に力を尽くされ、患者などから寄せられる諸問題を検討する連絡会の立ち上げに貢献された堀川楊さま、長野県阿智村で、かかりつけ医、また、学校医として村民を支え、90歳を超えた現在でも現役で活躍されている橋上好郎さま、熊本県球磨郡で、在宅医療や学校保健の向上、福祉事業、水俣病患者の支援に取り組んでこられた緒方俊一郎さまと、それぞれの地域で献身的、継続的な活動をされてきたことに、改めて深く敬意を表します。

地域医療には、病気の治療だけでなく、その地域の人々のさまざまな思いを受け止め、寄り添っていく存在が不可欠です。

地域の中で、さまざまな形で長年、住民を支えてこられた皆さまは、住民に安心を与え、地域医療を豊かに育んでこられたかけがえのない方々であると思います。

本日受賞された皆さまをはじめ、「かかりつけ医」の皆さまを支えるべく、各都道府県と協力しながら、地域での医療、そして介護の総合的な確保に努めて参ります。

また、医師をはじめとする働き方改革や、地域の医師偏在解消にも、全力をあげて取り組みます。これらの実現に向けて、本日「赤ひげ大賞」を受賞された方をはじめ、現在地域の第一線で活躍されている皆さまに、引き続き御理解と御協力を賜われますと幸いです。

最後に、受賞者の皆さまが今回の御受賞を契機としてさらに地域において御活躍されること、また本日お集まりの皆さまのますますの御健勝を祈念して、私の挨拶といたします。

神奈川県医師会 会長

菊岡 正和



この度、「日本医師会 赤ひげ大賞」を受賞されました5名の先生方に衷心よりお祝いを申し上げます。

第7回を迎えた赤ひげ大賞ですが、地域住民の方々が住み慣れた土地でその方らしい暮らしを全うできるよう、患者さんに寄り添い、医療、介護、福祉といった多方面での支援を行う、かかりつけ医の果たす役割は極めて大きく、これまで地域医療の発展のために切磋琢磨してこられた先生方の永年のご功績に敬意を表します。

受賞者の1人であります千場純先生は、在宅死率が全国1位であった横須賀市において、20年以上もの永きにわたって在宅医療の推進に尽力されており、ご自身も在宅看取り医として、これまでに1,000人以上の患者さんを看取られた経験をお持ちです。

また平成24年には同市に在宅医療推進連携拠点「かもめ広場」を開設し、病診・診診連携、市民への意識啓発等を行っているほか、自らの診療所を開放し、在宅医療・介護関係会合の場を提供されるなど、横須賀地域における在宅医療の推進、多職種連携に多大な貢献をされました。

我が国では、団塊の世代が後期高齢者となる2025年を目前に控え、慢性的な医療人材の不足が続く一方で、地域医療を支える在宅医療・訪問看護のニーズは、ますます高まって参ります。

神奈川県医師会としても、行政、医療関係諸団体の皆さまとの連携を深め、医療政策の実現に貢献できるよう取り組んで参る所存です。

最後になりますが、受賞者の先生方のご健勝と今後ますますのご活躍を祈念申し上げるとともに、主催の日本医師会、産経新聞社、ご後援の厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ、特別協賛の太陽生命保険株式会社の皆さま、選考委員の方々に感謝を申し上げ、私からのお祝いの挨拶いたします。

本日は誠にありがとうございました。

日本医師会

赤ひげ大賞

豪雪地域で地域医療を牽引

大里医院 理事長

大里 祐一

〈 秋田県 〉

おおさと・ゆういち 医療法人春生会大里医院理事長。昭和11年、埼玉県浦和市生まれ。83歳。東北大学医学部卒。大館市立総合病院内科勤務の後、昭和47年、父・文祐氏の後継として大里医院を継承。平成24年には介護療養型老人保健施設大深を併設。



(大西正純撮影)

険しい雪道をオフロード型四輪駆動車が力強く走る。午前中の外来診療を終えた後、午後を訪問診療に充てている。白衣に長靴。これが大里祐一医師の冬の往診スタイルだ。「これが、夏になると、白衣とゲタになるんですよ」と快活に笑う。

鹿角市は秋田県北部に位置する人口3万1437人、高齢化率37.8%（平成28年）に達する高齢過疎地域だ。市内には13の医療機関があるものの、人口10万人当たりの医師数は秋田県の平均値の65%にとどまっている。一方、その面積は広く、多く

は中山間地域であり、無医村地区が2カ所、準無医村地区が1カ所ある。また、冬季は寒冷豪雪のため、一部通行止めになる区間があり、日常の交通インフラに支障をきたしている地域もある。そんな中、大里医師は、昼夜を問わず患者宅を訪問し、診療に当たってきた。患者の容体が急変すれば、真夜中に呼び出されることもしばしばだ。

普段の訪問診療は一日に6件ほど。患者個人の自宅のほか、グループホームや介護施設なども見て回る。遠いところでは、16キロ先まで車を走らせるが、「苦に思ったことは一度もない」と言う。

勉強になるのは凶作の時

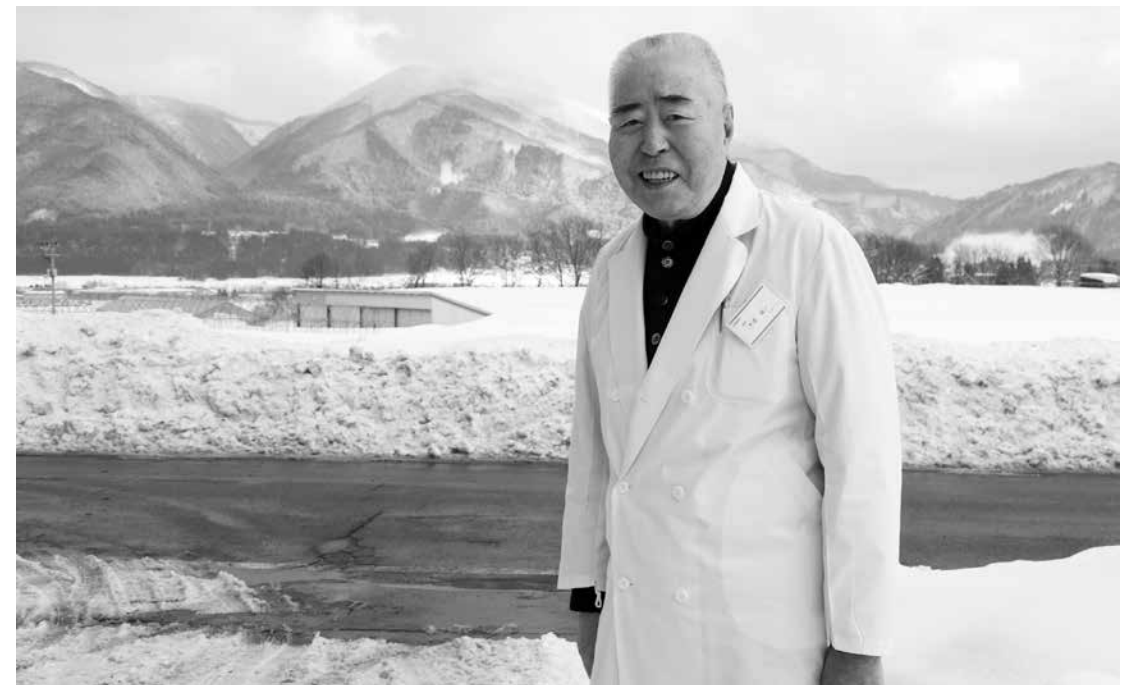
大里医院は明治24年、祖父の文五郎氏によって、鹿角市花輪地区に開設された。以後、128年もの間、父の文祐氏、祐一氏と3代にわたって、地域住民の医療・保健・福祉の向上を牽引してきた。「働いている人たちが受診しやすいように」と日曜日も診療を行い、地域住民から絶大な信頼を得ている。

大里医師が父から医院を継いだのが昭和47年。地域での救急から在宅に至るまで一貫した診療に取り組んできた。その歩みは、「地域医療」という言葉が一般的に使われていなかった時代から地域で生活している人々に寄り添う姿勢で貫かれている。

医師を目指そうとしたきっかけは、「何も崇高な志があったわけではなく、じいさんとおやじがやっていたから。田舎の医者と



冬の往診は白衣に長靴スタイル



医療活動の中で「苦労したことはない」と語る

しては、それが当たり前のことだと思っていた」と話す。訪問診療が今のように普及する以前から、山間の豪雪地域である八幡平地区の往診を行ってきたが、これも「おやじがやっていたので、何も特別なことだとは思っていなかった。じいさんも人力車を使って回っていたという話を聞いています。医者と芸者は座敷がかかったら、行かなければならないんだというのが、昔から私の流儀ですから」と言う。

海外登山の経験も豊富で、アフガニスタン、ネパール、パキスタン、チベット、インド、中国などの遠征隊に医師として参加してきた。「これは、趣味というより生活だね」と笑う。

平成7年の阪神淡路大震災の際には、寝袋を背負って神戸市長田地区の小学校にいち早く入り、医療活動に当たった。この時には、海外登山の経験から登山用のガスボンベを持参し、物資不足の診療現場で喜ばれたという。平成23年の東日本大震災の際も、同じように率先して被災地に入り、救援活動に当たった。

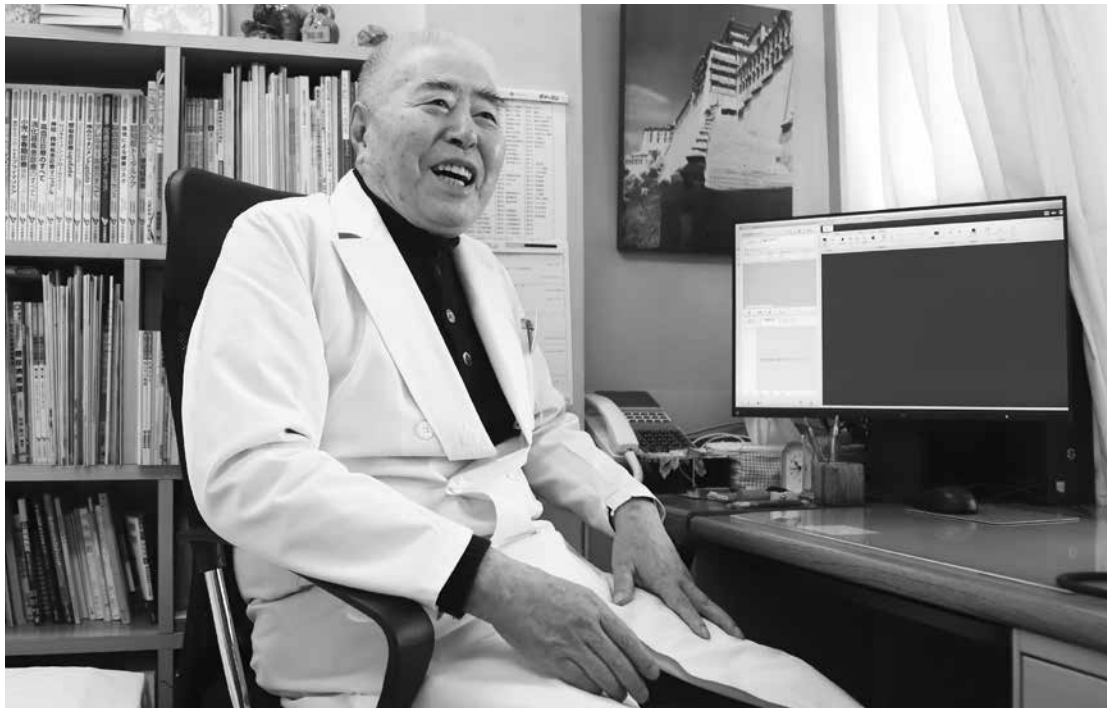
「米でも何でも豊作と凶作を繰り返す。勉強にな

るのは、凶作の時なんですよ。だから、そこへ行っても勉強するべきだというのが私の持論です。野球でもパチンコでも、負けた時の方が勉強になるんです」

約半世紀にも及ぶ医療活動の中で、「一番苦労したことは？」と尋ねると、「ないね」ときっぱり。「たとえば、あったとしても忘れる。何しろ、生きているんだから。終戦当時の食う物が無い時と比べたら、屁でもない」と笑い飛ばす。

年々増える孤独死

平成元年からは、警察医としての活動も行っている。警察と協力して検案を行い、死体検案書を書く仕事だ。これまでに約1500件の検案に当たってきたが、同地区は、高齢独居者も多いことから、孤独死のケースも多い。「死体検案で行っても、死んで1週間後とか、2週間後とかいうことが年々、増えてきています。仏さんはかわいそうですよ。昔は、家の前に牛乳瓶が並んでいる。あるいは、新聞が取り込まれていないということで気づくということが多かった。



常に笑顔で患者に対応



地域住民からの信頼は厚い



地域に密着した医療活動



3代続く大里医院



働いている人のために日曜日も診療

いまは牛乳も新聞も取らないという人が増えてきている。近所の人が、電気が何日も付けっぱなしだということに気づくというケースもあります。孤独死をどうやって防ぐのかというのは、市長ともいろいろ話すんですけど、これからの課題ですね。だんだん世の中が変わってきて、人間関係が希薄になっている。これも仕方のないことなのかなあ」と少し寂しげな表情を見せた。

また、最近、世間を騒がしている児童虐待事件の数々にも心を痛めている。「日本という国、日本の国民はどうしてこうなっちゃったんだろう。本当に嘆かわしいことですよ」

医師としての活動だけにとどまらず、平成3年には県議会議員に選出され、通算5期務めた。平成23年には県議会議長にも選出されている。この間、県に対してさまざまな提言を行い、医療の本質を見失うことのないよう、県の医療政策に医師の姿勢を

反映させる支柱として活躍してきた。

そんなオールマイティーな大里医師にも苦手なことがひとつだけある。それは、患者から「ありがとう」と言われることだという。

「困っちゃうんだよね。ありがとうと言われると、つい、その気になっちゃうから。もう年だから、日曜診療もやめたいんだけど、やめられなくなってしまう。正直、この赤ひげ大賞にも困惑しているんですよ。そんなたいしたことはしていないし、満足なことができているとも思っていないから」

そう照れ笑いを浮かべながらも、あくまでもその表情は柔和だ。

83歳になったいま、登山こそやめたが、健脚ぶりに変わりはない。今日もいつもと同じように、白衣に長靴姿で、患者のもとへオフロード型四輪駆動車を走らせている。

(本間普喜)

自宅で迎える安らかな最期のために

三輪医院 院長

千場 純

〈神奈川県〉

ちば・じゅん 三輪医院院長 昭和24年、横浜市生まれ。69歳。名古屋大学医学部卒。横浜市立大学第一内科、パシフィック・ホスピタル院長などを経て平成13年から三輪医院副院長、22年から現職。これまでに在宅医療の現場で1000人以上の患者の最期を看取ってきた。平成27年には社会福祉法人化、医院近くに地域住民の交流と啓発の場「しろいにじの家」をオープンさせた。



(桐原正道撮影)



患者に笑顔をもたらす

脳梗塞に倒れ、自宅のベッドで寝たきりになった男性患者に顔を近づけて「奥さんのこと、好きですか?」と大きな声で語りかける。寝返りもままならない男性が顔をくしゃくしゃにしていなずくしぐさを見せると、妻が介護に当たる一軒家にあたかな空気が流れ込んだ。港に海上自衛隊の艦が浮かぶ神奈川県横須賀市の起伏に富んだ街並みを移動するさなか、その姿を見かけた市民からたびたび「あ、先生だ」と声が飛ぶ。全国平均に比べて5年早く高齢化が進んでいると言われるこの中核都市で有名な「まちのお医者さん」だ。

「納得できる死」を

大学病院に勤務する駆け出しのころ、いつの間にか病院にやってこなくなる患者がいるたびに「今ごろあの人はどうしているのだろう」と思いが募った。治る見込みが薄い中、入院生活に見切りをつ

け、自宅に戻りたいと訴える患者にも出会った。病院ではなく、住み慣れたわが家で安心して残された日々を過ごす一。文字通り、患者の人生最後の望みについて考えさせられた。

現在、院長を務める三輪医院は丘陵地に開かれた住宅街の一角に建つ。横須賀市は明治初期に軍港が設置されたことから、関係者の住宅供給のために斜面部にも市街地が展開されたと言われている。現在も、自動車で入ることができず坂や階段が多い「谷戸」と呼ばれる地区も残り、通院や在宅医療には厳しい条件が横たわる。

そうしたハンデを埋めるべく、市医師会の活動に平成10年から理事として参加し、医療と、そして介護、福祉など、患者を支える職種との連携を進めてきた。24年、医師会は市と協同で、在宅医療の推進や、多職種で患者を見守る体制作りを整え、26年に自宅で亡くなった人の割合は全体の22.9%と、人口20万人以上の都市で全国トップになった。自身はそ

1000人以上の人々の最期を見届けてきた。

普段から白衣は身につけず、細身の体にはカジュアルな装いがよく似合う。「医師の権威」によりかからない穏やかな雰囲気、多くの患者や家族に受け入れられる由縁なのだろう。午前中、診察室を訪れた80代の女性が、若いころにたしなんでいたボウリングを「もう一度やってみたい」と口にした。すると、すかさず「ちょうど桑田さんもやっていて話題になっているし、いいかもね」と声をかける。ここ最近、ボウリングの腕前に一躍注目が集まっている同県出身のミュージシャン、桑田佳祐について触れたもので、病院で飛び出した意外なキーワードに付き添っていた女性の顔にも笑みがあふれた。

男性患者に対しては、ひととおりの診察を済ませた後、表紙に「リビングウィル」と書かれた1冊の冊子を差し出した。将来、自身が回復の見込みがない段階を迎えた時に備え、事前にどんな医療を受けるか

意思表示を行う、「生前に発行される遺書」を指す言葉だ。

「今はいいと思うかもしれないけれど、ちゃんと自分が亡くなった時のことを考えておこう」と男性に呼びかける姿が印象深い。三輪医院では、「死」という単語はタブー視されることなく患者に伝えられる。地域住民に対しても、取り上げ方が難しいとされる終末期医療について、時に笑いを交えながら講演を行ってきた。「大事なのは本人が『納得できる死』を迎えられるかどうか。『縁起でもない』。そう言って目を背けないでほしい。死を考えるということは、生きることを考えることでもあるのですから」

思いやる気持ち

医院での診察を終え午後2時になると、おおむね6時まで訪問診療へと向かう。移動に用いるのはス



患者に最期への備えを呼びかける



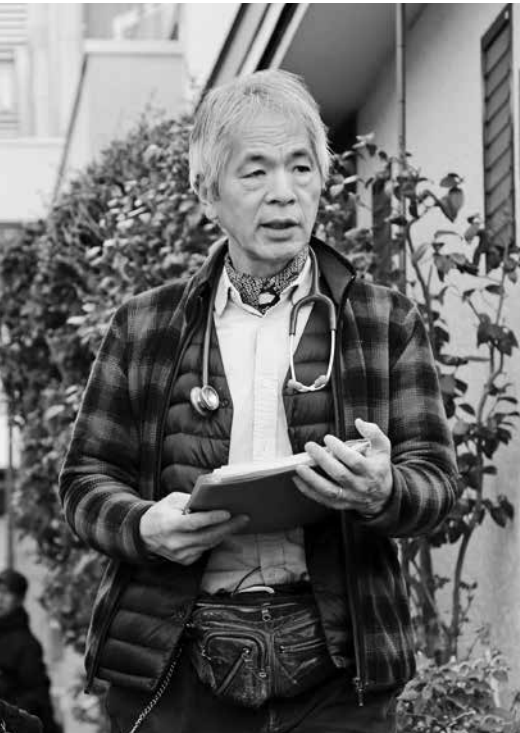
訪問診療先で。その場が明るくなる



午後からスタッフとともに訪問診療へ



小高い丘の上に建つ三輪医院



普段着で患者と向き合う

スタッフが運転する軽自動車だ。昼食をとる時間がない時は、その車の助手席でコンビニで買ったおにぎりを頬張る。横須賀市を中心に行く先々で診る患者の容体はさまざまだが、原則月2回、やってくる「普段着の先生」を誰もが心待ちにしている様子が伝わってくる。

在宅医療を説明する際、「家に新しい風を入れる」と表現する。それまで家族と病人だけがいた空間に、医師や看護師などが足を踏み入れることで風

穴が空くという。実際、初めて訪れた時、乱雑だった部屋の中が訪問の回数を重ねるごとにこざっぱりとした印象に変わり、目にする家族の表情が明るくなるのを感じたと振り返る。

つまるところ、在宅医療はコミュニケーションだと話す。医療の進歩で病魔による身体的な苦しみは取り除けるようになった。では、心理的な苦しみはどうか。天涯孤独の患者でも、自分たちがつながりを持つことで「死の質」は変えられるはずだと信じる。

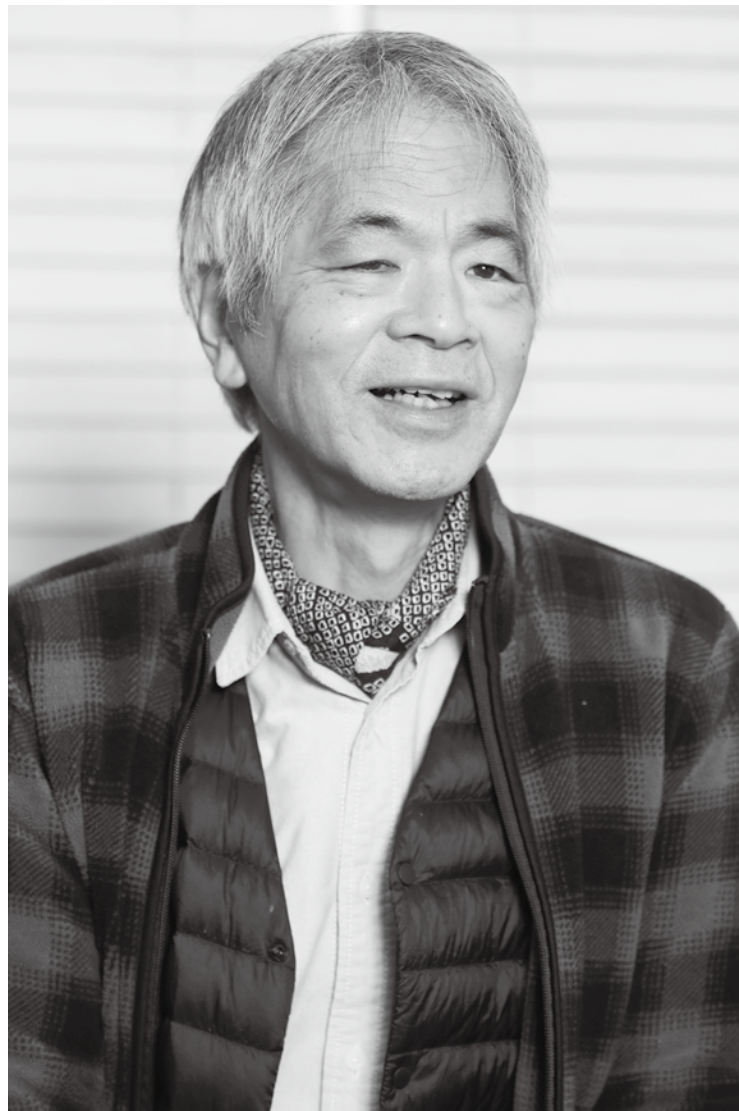
在宅医療では1人の患者に対し、さまざまな人々が関わることになる。間もなく訪れようとしている超高齢多死社会を前に、医師としてそのチームの旗振り役を担いたいと望む。

入院先から自宅に戻り、日々を過ごしているという女性は三輪医院を訪れ、「家にいると昔のことを思い出します。猫が子供を産んだ時のことや、花が咲いた時のこと…。一つひとつの思い出が、輝いてみえるの」と言い、柔らかな笑みを浮かべた。主治医が理想とするとおり、自身の人生に心から満足している様子は美しかった。

「病気を治すだけでなく、もう治らない人にどう接すればいいか。そこはやはり、思いやりを持つことに尽きると思います。医療の立場から医療の、介護の立場から介護の手を差し伸べる。それが合わさった時にいい結果が生まれるのです」

(宇都木渉)

これからも手を差し伸べ続ける



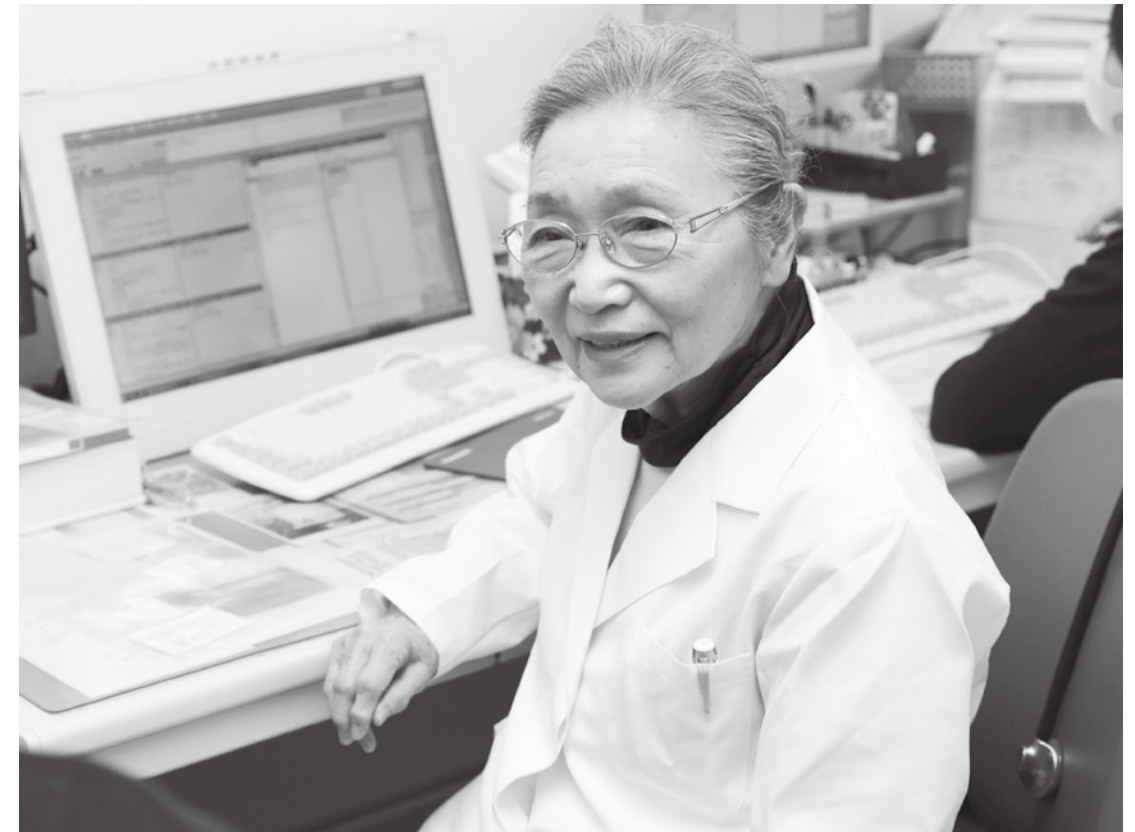
「キュアできない患者をケア」神経難病患者の退院後在宅ケアに尽力

堀川内科・神経内科医院 理事長

堀川 楊

〈新潟県〉

ほりかわ・よう 医療法人社団朋有会堀川内科・神経内科医院理事長。昭和15年、新潟市生まれ。78歳。新潟大医学部卒。同大学院医学研究科(神経内科学)、同大医学部附属病院神経内科助手、信楽園病院勤務を経て、平成9年、堀川内科・神経内科医院を設立。神経内科医、理事長として勤務し、神経難病患者の退院後の在宅ケアに尽力している。



(飯田英男撮影)



患者に優しく話しかける

新潟県。新潟市中央区にあり、日本海と信濃川、関屋分水路で陸から切り離された地区の通称だ。周囲約15[㌔]の小さな島だが、新潟県きっての繁華街、古町や市役所、白山神社、新潟大学医学部など多分野にわたる拠点が集積する。明治22年の市制施行時の新潟市にほぼ該当し、合併が進み広域化した市の心臓部。その南西部の住宅街に建つのが、堀川内科・神経内科医院だ。

「自分が生まれ育った地域に尽くしたい」。堀川楊医師はそう決意し、実家の敷地を活用して開業した。訪問看護ステーションと在宅介護支援センターを併設。約20年にわたり、治療困難で生活障害の重い神経難病患者を診てきた。

毎週2回、午後一番の外来患者の診察を終えると、看護師が運転する紅色の軽自動車に乗り込む。道が曲がりくねった古い町並みを進み、神経難病で

寝たきりになっている女性(91)の自宅へ向かった。

「こんにちは」

手慣れた様子でドアを開け、玄関に入る。奥の和室では、女性がベッドで横になっていた。

「ママ、先生よ」

医師だったという女性に家族が声をかけた。月に一度の往診だ。

「血圧を測らせてくださいね」

優しく声をかける。目配せで答える女性。長年にわたる信頼関係が伺える。やせ細った足を上げ下げし、筋力や関節の状態を確認する。

「最近、熱は出てないですか」

「はい」

家族とのコミュニケーションは欠かせない。女性は在宅療養を始めて15年。家族と親戚だけでは面倒を見きれない。家政婦を頼み、週に2回の訪問看護

も受ける。それぞれが連携を取りながら、女性のケアを続けている。

「堀川先生は医療面では厳しいけど、とても優しい人」。家族からの信頼は絶大だ。

キュア(治療)できない患者をケアする

若き日に新潟大学医学部から同大学院医学研究科(神経内科学)へと進み、新潟水俣病の原因を特定したことで名高い樫忠雄教授の薫陶を受けた。

「キュア(治療)できない患者をケアできる道があるのではないか」

そんな樫教授の思いを実現するのがライフワークとなった。時はまだ、神経難病患者の在宅ケア黎明期。神経内科医を志す^{れいめい}医師の卵、たちの心は揺れていたが、一筋の道が指し示されたのだった。

大学病院時代、ALS(筋萎縮性側索硬化症)な

どの進行性神経難病で在宅療養している患者の往診を思い立った。当時、定期的な往診の仕組みはなかったが、実際に行ってみて驚いた。風呂にも入れず、汚物の処理もしてもらえない患者を目の当たりにした。

「患者がきれいにいられない姿を見て切ない思いをした。せめて入院している患者みたいにきれいにできないかなと。女性の医者としては自然に考えることでしょう」

昭和52年、神経内科を作ったばかりの信楽園病院(新潟市西区)の勤務医になった。初めての面接で上司から「何をしたいのか」と聞かれ、「退院した患者に入院している時のような医療を出前したい」と答えた。「それは必要なことから、すぐやりたまえ」と言われ、翌53年には継続医療室を立ち上げ、退院後の患者らの在宅ケアを実践した。

事実上の手探り状態だったが、看護部長と2人で



リラックスした雰囲気包まれる問診



「人につきあうことが好きだからやってこれた」と語る



堀川内科・神経内科医院の待ち合い室



住宅街にたたずむ医院



外来診療を終え往診に向かう

訪問看護の方法論を求め、先行する旧東京都立府中病院を見学し知見を得た。旧厚生省の研究班にも参加した。

現場から政策提言

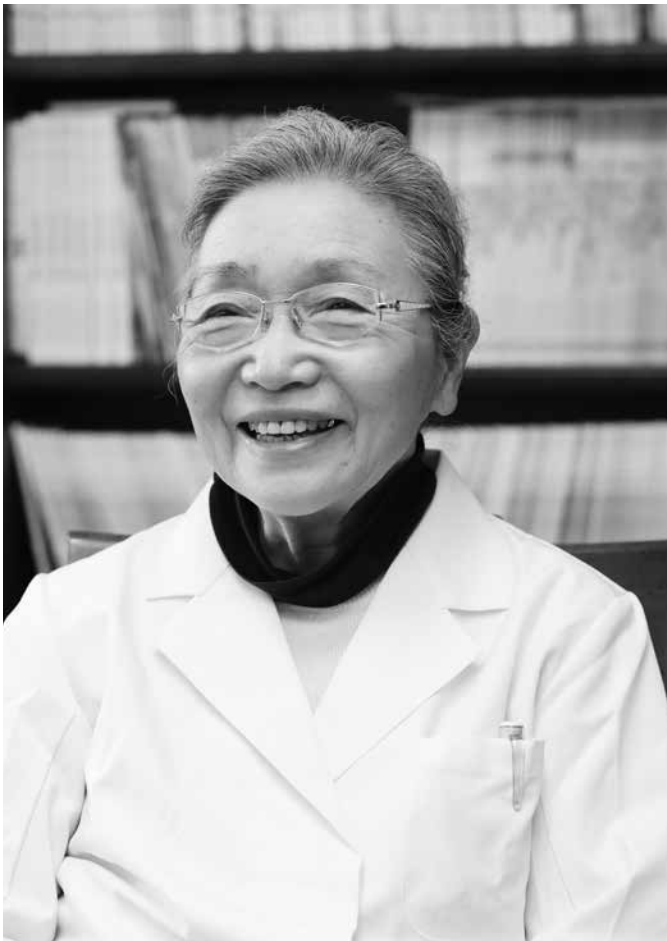
地道に積み重ねた経験と人脈を生かし、新潟で地域の医師と保健師、ヘルパーなどが共同して在宅医療を提供するシステムを築き上げた。62年には、日本ALS協会新潟県支部の設立に寄与。医療・保健・福祉・行政が一体となった協議体と、その下部組織としての難病患者のケース会議の設立を促した。ボトムアップ型の仕組みづくりは「新潟方式」とも呼ばれる。

現場主義を貫き、社会的弱者になりがちな難病患者と家族のニーズを引き出して政策提言を続けた。毎年1回、呼吸器を付けた車いすの患者と一緒に新潟県庁や新潟市庁舎を訪れ、医療機器購入の自己負担軽減措置などを陳情した。

「いま、一生懸命やっているのは地域包括ケアシステムを現実的に動くものにすること。いまはまだまだ。とにかく、予算がない」。難病患者とその家族のための活動はとどまるところを知らない。身長148㎝という小さな体から、巨大なエネルギーを発し続けている。

自身、両親と姉の介護をしてきた。いまは夫を介護する。平日は患者宅、週末は自宅で在宅ケアをしている。堀川内科・神経内科医院の休診日には、古巣、である信楽園病院の患者を訪問する。退院後のケアをスムーズにするためだ。

「どんなに貧しくても、どんなに重症でも、日々の生活の中にはちょっとした喜びがあるもの。患者や家族が幸せそうにしているのを見た時に『よかったね』と共感できる瞬間がなによりうれしい」



笑顔が絶えない堀川医師

いまでも、大学病院時代に見た患者の孤独な姿が目に残り、離れない。当時、在宅ケアは家族だけで背負い込み、ほとんどなすすべがなかった。

その後半世紀をかけ、医師や家族ら関係者の必死の努力で医療・介護制度が発達し、地域全体で見守る仕組みづくりが進んだ。以前に比べれば、重症者がいる家庭でも気持ちにゆとりを持ち、楽しいことを少しずつ見つけながらケアすることができるようになったという。

「それが『ケアできない患者をケアする』ということだったのでしょ」

恩師が遺した問いに、自分なりの答えを見つけた。堀川医師はいま、そう思っている。

(池田証志)

「家族」を見守る 生涯現役の93歳医師

医療法人健生会 理事長

橋上 好郎

〈長野県〉

はしがみ・よしろう 医療法人健生会理事長。大正14年、大阪市生まれ。93歳。岩手医学専門学校（現岩手医科大）卒業後、佐久間村立診療所（静岡県）などを経て、昭和31年に長野県阿智村で「橋上医院」を開院。阿智村下清内路診療所など村内の4つの診療所院長を長年務め、村民の健康を62年にわたって支え続ける。



(酒巻俊介撮影)

車1台がようやく通れる山間の細道が、集落と集落をつなぐ。「昔は舗装なんてされてなくて道はがたがただった。深夜に往診に向かう途中、オートバイが石の上に乗り上げちゃって、大変だった」

発端は、乳腺炎になった村内の若い女性からのSOSだった。往診して患部を切除し、自宅に帰って休んでいたが、午前2時ごろ、「痛くなってきた」と連絡が入った。寝間着を着替えオートバイで再び往診に向かう途中、がけから20メートルほど転落したのである。落ちてくるオートバイから何とか身をかわし大きなけがはなかったが、まさに危機一髪。一歩間違えば死んでいたかもしれない。村に来て間もないころのそんな思い出話を、楽しそうに語る。

「この仕事が好きなんだね。好きなことをやってお金をもらえる。おまけにありがたいと言われる。世の中には、必要であっても誰かから憎まれる仕事もあるなかで、人を助ける仕事に就けてよかった」

生まれは大阪。毎年、阪神タイガースの応援に行く生粋の「虎党」だ。だが、先の大戦で大阪の家が焼け、戦場に出るのであれば軍医として行こうと岩手医学専門学校に進んだ。在学中に終戦となり、昭和25年に卒業した後は、岩手医科大付属病院と静岡県内の2カ所の診療所勤務を経て、31年に長野県阿智村に開院した。

それ以来、医療過疎の地域で医療を一手に担ってきた。24時間、土日もなく、呼ばれば往診に行った。一晩に往診が3〜4

件入ったこともある。お産から開腹手術、時には検死まで、診療科の枠を飛び越えて何でも診た。現在は3人以上の医師で行うのが当たり前の外科手術も、1人でこなした。

村内の6つの小中高校では、学校医を39年間務め、村内の6つの企業の産業医にもなった。「この世に生まれて最初に見たのは先生の顔だ」と語る患者もいまや、うれしそうに孫を連れてくる。



患者への温かなまなざしを忘れない

村の活性化にも尽力

「大阪には18年おったきり。62年間、ここで一家四代を診とるで、こっちの方がふるさとです」

村が「ふるさと」と思えるようになるまでには苦勞もあった。日本一の星空と、美肌の湯として知られる昼神温泉で有名な阿智村。これを目当てに訪れる観光客も多いが、昔は産業も少なく貧しい村だった。診療費や薬代が払えない患者もあり、村から支払われる報酬が滞ったことも。生活に困り、家財道具を売ってしのいだ。

「貧乏暮らしで、家内と子供には苦勞をかけた。まだ小さかった子供のミルクをかうお金もなくて、かわいそうなことをした」。妻と長男に先立たれたいま、当時のことを思い出すと不憫で涙が出る。

だが、「仕事では悲しいことはなかった。患者一人ひとり、みんな思い出がある。村中、知らんもんはおらん。どこの猫が子猫を何匹産んだかも分かるくらいだ」とふるさとと仕事への情熱は衰えない。

村のため、できることは何でもやってきた。地元の少年野球チームにユニフォームを寄付するなど、チームを物心両面から支援。60歳以上のシニアの野球チームを全国から集めて生涯野球大会を村内で開催。昼は野球、夜は温泉と、観光客の少ない時期に多くの人を呼び込んだ。1200本を植樹したハナモモは、春になると一斉にピンクの花をつける。過疎地の医師ができることは医療だけではない。村の活性化にも長年、力を尽くしてきたのだ。

村の保健担当だった時から30年来のつきあいだという元村職員の佐々木幸仁さん(69)は「ずっと僻地医療に尽くしてくれたありがたい存在です」と



気心の知れた患者には軽口をたたくことも



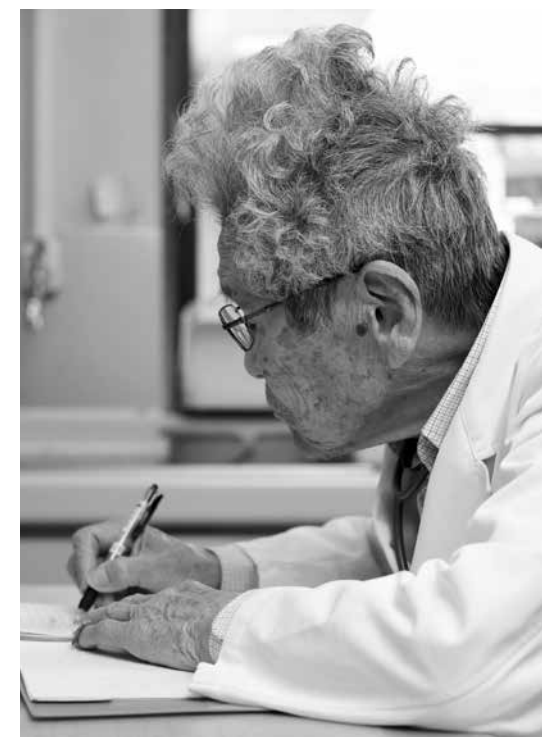
村での経験はすべてが大切な思い出だ



92歳まで通った診療所の前で



70歳のとき開設した施設



患者の様子を書き留める

感謝の言葉を口にする。「風邪を引いた」と診察を受けに行ったら、「風邪かどうかは俺が診る」と怒られたエピソードを苦笑いとともに紹介しつつも、「言うべきことは言ってくれる先生。村の人は、そんな先生のが大好きなんです」と厚い信頼をのぞかせる。

「手本になるよう生きる」

仕事をする上で大事にしているモットーがある。「自分が100%正しいと思っちゃいけない。自分本位で仕事をするな。いばるな。自分を犠牲にしてこそ

医者だ」というものだ。「病気を治すのが医者の仕事ではない。患者は自分自身の力で治る。それを手助けするのが医者だ。若い医者にもそれを伝えたい」

年齢に限界を感じることなく、介護老人保健施設「アルテンハイム会地（おうち）の郷（さと）」を作ったのは70歳の時。現在もここで、入所者の体調管理やリハビリの支援を行う。高齢者施設なのに、多くの場合、患者は自分より年下だ。それだけに、指導にもつい熱が入ってしまう。

「えらくっても歩かにゃだめだで」「人に頼ったらだめ。やれることは自分でやらにゃ」「好きなもんだけ食っとっちゃだめだ」

口調は厳しいが、歩行器で懸命に歩き熱心にリハビリをする患者に向ける視線はあたたかい。「村の人はみんな家族です。素直で、言うことをきいてくれる」

その「家族」がしみじみと言う。「自分ひとりだと歩けない。どうしても頼っちゃうなあ。本当にありがたい。先生のおかげだ」

若い人と変わらない早足で、次の患者のもとへ向かう。首にかけた聴診器は長年の相棒だ。白衣のすそが軽やかに揺れる。

「ばくがよろよろしとったら、患者さんに何も言えない。手本になるように生きとるんです」

93歳になっても白衣を脱がない理由はただひとつ。この先に、家族が待っているから。

（道丸摩耶）



患者のリハビリを励ます

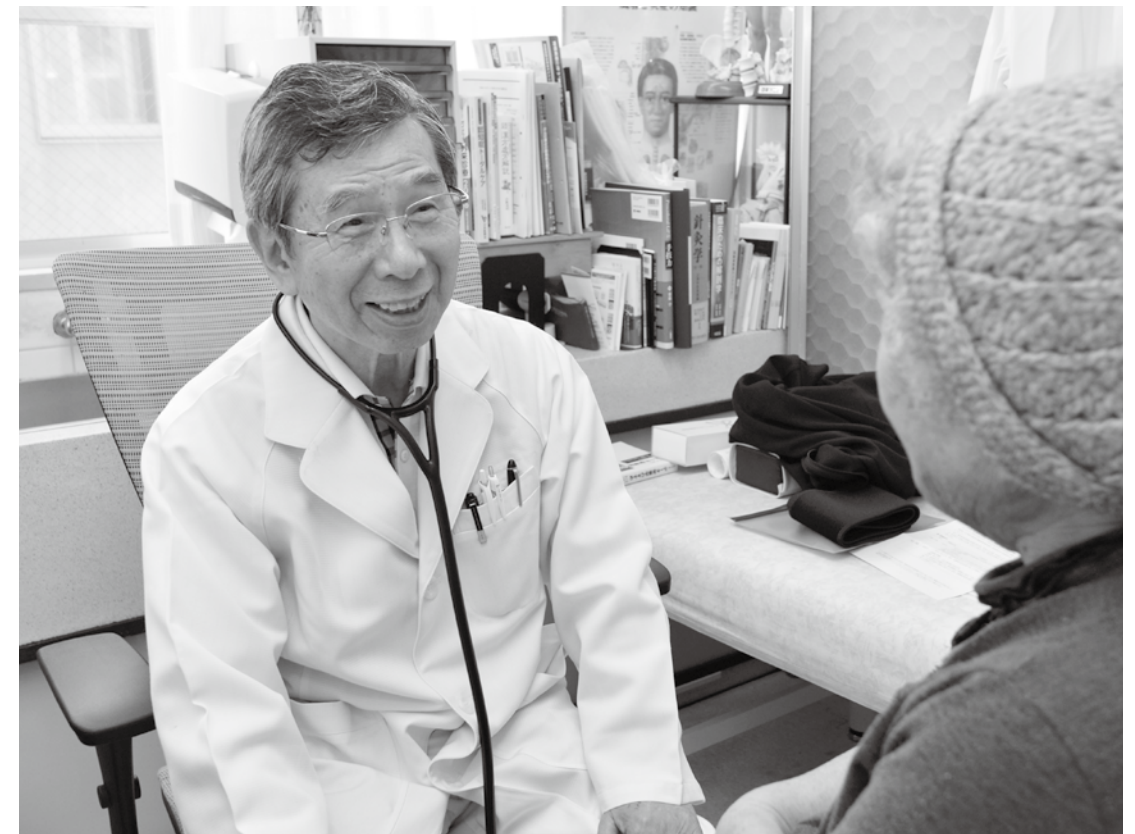
頼れる村医者、回復した患者の笑顔励みに

緒方医院 院長

緒方 俊一郎

〈 熊本県 〉

おがたしゅんいちろう 医療法人仙寿会緒方医院院長。昭和16年、熊本県相良村生まれ。77歳。44年、九州大学医学部卒業後、46年に同医院の6代目を継承。特別養護老人ホームやグループホームなど介護施設も運営する。球磨郡医師会会長や、熊本県医師会理事などを歴任。村の嘱託医や校医などを長年務め、行政にも助言する。



（奥清博撮影）



長年のつきあいで患者の人柄もよく分かる

熊本県南部の山間部に、ハートの形をした村がある。人口約4500人の相良村。村にただ一つの有床診療所で、48年にわたり、治療に情熱を注いできた。

「血圧測りますね。落ち着いておられるので安心しました」。訪問診療で82歳の男性に話しかけた。男性はかつて脳梗塞を患った。「元気になったら、また釣りに行きたい」。振り絞るように声を出した。

2人の年齢差は、5歳しかない。小さな村に住む、同世代の人間としてつきあってきた。2人の会話に、家族も和む。

医院は江戸時代末期の1823年に開業し、昭和46年に6代目院長となった。

周辺は田畑が広がる。往診に車で30分以上かかることも多い。祖父の代は人力車、父はバイクで往診に回った。今は淡いピンク色の乗用車を走らせる。

夜遅くでも、急を要せば出勤する。「必要があればすぐに駆けつける。医師はそういうものだ」と染み

ついている」。診療所では、近隣町村からの入院患者も受け入れる。

医院の門には、「全科」と書かれた札を掲げる。専門は内科や小児科だが、骨折や外傷の処置もする。

近くの消防署に救急車が配備されていなかった昭和50年ごろは、流産で大量出血した女性の処置もした。

医院にはCT(コンピューター断層撮影)など、高度な医療機器はない。

必要に応じて、周辺の医療機関と連携する。行政からも助言を求められる。

地域医療を支える。その責任感があるだけに、悔やむことも多い。

高齢化が進む地域では、孤独死がたびたび起こる。最近も、脳梗塞を患った70代の男性が、死後3日経って発見された。気をつけないといけない患者だと分かっていただけに、悔しかった。

何よりの励みは、回復した患者の笑顔だ。

毎月診察を受けている70代の女性は言う。「ここで診てもらおうと、これでまた1カ月は大丈夫だと思うんです」

治療だけではない支援

九州大医学部を卒業後、福岡都市圏の病院での勤務が決まっていた。しかし、院長の父が村長に転身することになり、「お前が帰ってこないで村の人が困る。医療は任せる」と請われた。「置かれた場所で、できる限りのことをやろう」と村に戻った。

着任早々、往診先で衝撃を受けた。室内に汚れた下着が散乱し、茶碗には、ひからびた米粒がついていた。室内で便も踏みつけた。

「医療以前の問題だ。治療だけでは、地域の人たちの支えにはなれない」。そう痛感した。

まだ介護施設は普及していない時代だった。高齢者が安心して生活できる場所を作ろうと、奔走した。村や県に掛け合い、昭和60年、医院の裏手に特別養護老人ホームを開設した。福祉事業の草分けでもある。

介護のノウハウはなく、スタッフと一緒に寝泊まりしてオムツ替えから始めた。その後、グループホームなど複数の施設も開いた。

自分を頼る患者、村人のため、できる努力は惜しまない。そう行動してきた結果、幅広い事業を手がけるようになった。

例えば61年、隣接する人吉市の学校で、吃音のある子供が訓練をしていた言語の通級学級がなくなった。

「なんとか残してほしい」という保護者の声を聞き、翌年に言語治療科「おとばはうす」を設けた。

在宅での看取りに対応しようと、訪問看護ステーションを設立した。医療ケアが必要な子供に、看護師を派遣する事業にも携わる。

「治療だけでは地域はうまくいかない」という思いが強い。

昭和40年代、地域で農業による健康被害が広がった時期には、農家や学校の先生を集め、食をテーマに勉強会も開いた。地域の暮らしや自然を守りたいと、ゴルフ場やダム建設の



世間話に入所者の表情が和らぐ



常に相手の身になって接する



施設ではさまざまな催しを開く



真剣な表情で患者を診る



「よか先生です」。入所者からの信頼は厚い



孫を見て「目に入れても痛くない」

反対運動もした。

患者と接する時は極めて温厚だが、自治体や国には、はっきり物を言う。

患者の気持ちを大事に

昨年4月、うれしい出来事があった。長男の創造氏(37)が、医院の医師に加わった。

創造氏はそれまで、県内の水俣市立総合医療センターで勤務していた。

幼いころは、医者にならないつもりだったという。周囲から「将来は医者だろ」と言われ、反発した。

創造氏は「でも、親の姿を見ていて、自分も同じ道に進むのは自然だと思うようになりました。スタッフの数も少なく、CTもない環境で、父はよくやっていると感じます。私もまずは、目の前のことを全力でやりたい」と語った。

緒方氏はそんな息子に医院を任せ、水俣病患者の治療に力を注ぐつもりだ。

研修医のころ、水俣病患者の治療ができる医師になりたいと、水俣市やその周辺に足を運んで調査や治療に携わった。

これまでに診察した患者は累計1千人を超える。昨年は東京や愛知に出向いて診察もした。

「潜在的に多くの患者がいる。特に県外の患者は、その地域の病院で、手足のしびれがヘルニアや糖尿病が原因と診断され、納得できない思いを抱えている。患者の苦しみを少しでも分かってあげたい」

献身的な対応が評価され、赤ひげ大賞を受賞した。

「そんな大それたことはしていない。大事にすることは、相手の身になってお世話をさせていただくということです。皆さん、何か困っているから相談してくられる。これからも、患者の気持ちを大事にして要望に応えたい」

少子高齢化が進み、医療環境は厳しさを増す。「相性がよくなる村」と呼ばれる相良村の医師は、どんな患者にも、愛情を持って寄り添っている。

(高瀬真由子)

日本医師会 常任理事

城守 国斗



受賞者の皆さま、おめでとうございます。

第7回「日本医師会 赤ひげ大賞」の選考経過のご報告並びに講評を述べさせていただきます。

第7回「日本医師会 赤ひげ大賞」の選考につきましては、昨年5月18日、日本医師会より都道府県医師会宛てに推薦依頼文書をお送りし、19の医師会から総勢20名のご推薦をいただきました。

選考に当たりましては、先ほどご紹介のありました9名の選考委員で審査を行い、その結果を基に、11月29日、日本医師会館で選考会を開催させていただきました。その後、本年1月9日に、今回の結果を公表し、本日の表彰式を迎えるに至りました。

引き続き、選考の講評を述べさせていただきます。

各都道府県医師会よりご推薦をいただきました20名の先生方は全て、本賞に値する素晴らしい活動を地域で続けてこられた方々ばかりであり、選考には困難を伴いましたが、その中で特に選考委員の目を引きましたのが、今回、大賞を受賞されました5名の先生方でありました。

「地域医療」という言葉が一般的でない時代から、地域住民に寄り添う姿勢を貫き、山間地域の医療と福祉の向上を牽引されている秋田県の大里祐一先生、「最期まで我が家で過ごせるまちづくり」をライフワークに、多施設・多職種と連携の下、在宅医療の推進に組織的に取り組んでこられた神奈川県千場純先生、治療困難で生活障害の重い神経難病患者に対する在宅医療の提供に尽力し、地域における退院後の受け皿の役割を担い続けている新潟県の堀川楊先生、身体だけでなく、患者一人ひとりの心にまで寄り添った医療を93歳になった今でも現役の医師として実践されている長野県の橋上好郎先生、子どもの発育支援から高齢者が安心して介護を受けられる場所づくりまで、幅広い知識と情熱を持って地域医療に取り組んでおられる熊本県の緒方俊一郎先生、先生方は、病気だけではなく、患者さんやそのご家族が暮らしている地域まで診ておられ、まさに医療でまちづくりを実践する現代の赤ひげ先生の心意気大変感動いたしました。

高齢社会を迎え、往診、在宅医療、看取りなど現場の先生方のご苦労は絶えないこととお察ししますが、日本の医療を支えていらっしゃるの、今回受賞された先生方をはじめとした地域医療に従事する先生方なのです。

本賞が、そのような先生方の励みとなり、地域医療の充実へとつながることを願っております。ありがとうございました。

2019年度

第8回「日本医師会 赤ひげ大賞」

● 推薦概要 ●

日本医師会

赤ひげ大賞

主 催	日本医師会、産経新聞社
後 援	厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ
特別協賛	太陽生命保険株式会社
対 象 者	病を診るだけではなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師。日本医師会の会員及び都道府県医師会の会員で現役の医師（ただし、現職の日医・都道府県医師会役員は除く）。
推薦方法	本賞受賞にふさわしいと思われる方（原則1名以上2名以内）を各都道府県医師会長が推薦
受賞発表	産経新聞紙上
選 考	日本医師会と産経新聞社の主催者側委員に第三者を交えた選考委員会において選定
賞状と副賞	賞状、記念盾及び賞金



保険で、 認知症を 予防!?

認知症を世の中からなくしたい。
それは、私たちの強い願いです。

人生100歳時代を、
ずっと元気に生きていくため。

保険にはもってできることがあると、

太陽生命は考えます。

たとえば認知症保険も、治療だけでなく

予防のためにも使えるよう進化します。

太陽生命の「ひまわり認知症予防保険」なら、

加入1年後から2年ごとに

予防給付金が受け取れるので、

軽度認知障害発症リスクの検査や

様々な認知症予防のために活用できます。

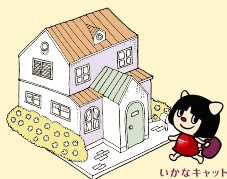
変化し続ける時代のニーズに、

太陽生命は保険でお応えしていきます。

業界初

ひまわり認知症 予防 保険

※当広告では選択緩和型認知症診断保険に生存給付金特則を付加したプランを「ひまわり認知症予防保険」としてご案内しています。状態継続日数の要件がなく、所定の認知症と診断された時に保険金を主契約でお支払いする生命保険は業界初です。(2018年7月現在、当社調べ)



かけつけ隊
におまかせください。

お支払い手続きその場でサポート!

お支払い手続きの専門知識がある職員がシニアのお客様のもとへ直接訪問し、お手続きのサポートをいたします。

